

アパート建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

はやし・ぼうじろいせき
林・坊城遺跡

2017年3月

高松市教育委員会

例　　言

- 1 本書はアパート建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、高松市林町に所在する林・坊城遺跡の調査報告を収録した。
- 2 発掘調査地及び調査期間、調査面積は次のとおりである。

調査地　　高松市林町三ッ股 1351-1
調査期間　平成 28 年 11 月 14 日～12 月 5 日
調査面積　124 m²
- 3 発掘調査から報告書の編集まで高松市教育委員会が担当し、その費用は事業者である植田 勤が全額負担した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、地方自治法第 180 条による補助執行により、高松市創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課文化財専門員 香川将慶及び同非常勤嘱託職員 中西克也、杉原賢治が担当した。
- 5 本報告書の執筆は第 2 章第 2 節を杉原が、それ以外を中西が行い、編集は中西が担当した。
- 6 発掘調査で得られた資料は高松市教育委員会が保管している。

凡　　例

- 1 本報告書の挿図として、国土地理院発行 2 万 5 千分 1 地形図「高松南部」の一部及び高松市都市計画図 2 千 5 百分の 1 「高松市街地」を一部改変して使用した。
- 2 標高は東京湾平均海面高度を基準とし、座標は国土座標第 IV 系（世界測地系）、方位は座標北を表す。
- 3 本報告書で用いる遺構の略号は次のとおりである。

S D : 溝　　S K : 土坑
- 4 挿図の縮尺は、遺構の平面図が 1 / 40、1 / 80、1 / 200、断面図が 1 / 40 であり、出土遺物の実測図は 1 / 3、1 / 4 である。
- 5 土層及び土器觀察の色調表現は、『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修）に拠る。

本文目次

第1章	調査に至る経緯と経過	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の経過	1
第2章	地理的・歴史的環境	
第1節	地理的環境	2
第2節	歴史的環境	2
第3章	発掘調査の成果	
第1節	調査の概要	4
第2節	遺構・遺物	5
第4章	まとめ	
第1節	遺構の変遷	10
第2節	林・坊城遺跡周辺の土地利用	11

挿図目次

第1図	高松平野における林・坊城遺跡位置図	1
第2図	林・坊城遺跡位置図	1
第3図	林・坊城遺跡周辺の遺跡分布図	3
第4図	調査トレンチ設定図	4
第5図	基本土層図	4
第6図	遺構平面図	5
第7図	SD 1 平・断面図、出土遺物実測図	7
第7図	SD 2 平・断面図	7
第8図	SD 3 平・断面図	8
第8図	SD 4 平・断面図	8
第8図	SD 5 平・断面図	8
第8図	SD 6 平・断面図	8
第8図	SD 7 平・断面図	8
第9図	SK 1 平・断面図、出土遺物実測図	9
第9図	SK 2 平・断面図	9
第9図	SK 3 平・断面図	9
第10図	林・坊城遺跡遺構配置図	10
第11図	条里分布図	12

写真図版目次

SD 1 土層（南から）	SD 3 完掘（東から）
SD 1 完掘（南から）	SD 4 完掘（南西から）
SD 2 土層（西から）	SD 6 完掘（南から）
SD 2 完掘（南から）	SK 1・2 完掘（南西から）

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査の経緯

アパート建設工事に伴い、事業者よりアパート予定地における埋蔵文化財の照会があった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である林・坊城遺跡に隣接し、その集落域が広がっている可能性が考えられたことから、事業者と協議の結果、任意の協力により事前に試掘調査を実施することで合意した。予定地の内で建物部分を対象地として、平成28年8月2・3日に試掘調査を実施し、溝・土坑の遺構を検出した。高松市教育委員会は確認調査結果を8月8日付けで香川県教育委員会と事業者に報告し、8月8日付けで香川県教育委員会から周知の埋蔵文化財包蔵地「林・坊城遺跡」として取扱うよう通知があった。その後、10月4日に事業者から文化財保護法第93条第1項に基づく発掘届出が提出され、高松市教育委員会から香川県教育委員会へ進達したところ、10月11日付で発掘調査を行うよう行政指導があった。

これを受け、高松市教育委員会は事業者と協議を行い、工事着手前に発掘調査を実施することで合意し、11月14日に埋蔵文化財調査協定書を締結した。業務名は「林町アパート建設工事に伴う埋蔵文化財調査管理業務」とし、高松市教育委員会は発掘調査・整理作業を行い、その費用負担及び契約・支払事務は事業者が行うこととした。

第2節 調査の経過

発掘調査は平成28年11月14日から12月5日の日程で実施した。遺構面へ影響が及ぶ建物の基礎部分のみを調査対象と決定した。調査面積は124m²である。調査の経過は以下のとおりである。

11月14・15日 重機による遺構検出面までの掘削を行う。

11月21～25日 人力による遺構検出と遺構の調査を行う。

11月28日～12月5日 遺構の平面図・土層図を作成する。

整理作業は高松市埋蔵文化財センターにおいて調査終了時から平成29年2月末までの期間に随時実施した。



第1図 高松平野における林・坊城遺跡位置図



第2図 林・坊城遺跡位置図

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

高松平野は東西約12km、南北約10kmの広がりを持っており、東を立石山塊、南を讃岐山脈、西を五色台・堂山等に取り囲まれ、北は瀬戸内海に面している。平野西部には本津川・香東川、平野東部には春日川・新川が流れている。平野の南部は段丘状地形が発達し、その先端の緩斜状地形を経て氾濫平野・河口の三角州へと続いており、南から北に向かって緩やかに低くなっている。

林・坊城遺跡は高松平野のほぼ中央に位置し、約1km東側には春日川が流れ、西側には埋没旧河道を利用した大池や長池などの溜池が点在し、遺跡の周辺には方格地割が比較的良好な形で残存している。

第2節 歴史的環境

高松平野では、ここ20数年間の大規模開発事業（太田第2土地区画整理事業、高松東道路建設事業、空港跡地開発事業等）に伴う発掘調査により、遺跡数が飛躍的に増大し面的に遺跡の広がりや内容が判明している。今回の調査地である林町周辺においては、上記の開発事業の他、都市計画道路や四国横断自動車道の建設等に伴う発掘調査が行われている。

旧石器時代の遺跡は、今回の調査地周辺では知られていない。

縄文時代では大池遺跡、林・坊城遺跡、居石遺跡が知られる。大池遺跡から草創期の有舌尖頭器が表採され、縄文時代晩期には、居石遺跡で土掘り具と考えられる石器や伐採具が出土している。林・坊城遺跡では、水田耕作の先駆けとなる諸手鍤や手鋤の木製農具などが出土している。

弥生時代前期では林・坊城遺跡やさこ・長池遺跡、空港跡地遺跡、日暮・松林遺跡、松林遺跡等が知られている。空港跡地遺跡では前期末～中期初頭の多数の土坑が、日暮・松林遺跡、松林遺跡でも同時期の遺構が確認されている。さこ・長池遺跡及びさこ・長池II遺跡においては前期～中期に想定される不定形小区画水田が検出され、林・坊城遺跡では水田は検出されていないが稲の花粉が検出されていることから稲の栽培が行われた可能性がある。このため林・坊城遺跡を含む周辺においては、縄文時代晩期から弥生時代にかけて稲作が行われていたことがうかがえる。後期になると、空港跡地遺跡では堅穴住居とともに、弥生時代後期～古墳時代前期の前方後方形及び前方後円形の周溝墓が検出されている。回原遺跡では14棟の堅穴住居が確認されている。また、林・坊城遺跡では後期の陸橋部を持った円形周溝墓が、宗高坊城遺跡からは土器棺墓が検出されている。林宗高遺跡では、住居等が確認されていないが、自然河道から多量の土器片が集中して出土していることから、周辺に集落があった可能性が考えられる。

古墳時代では、空港跡地遺跡で後期の堅穴住居が数棟確認されている。また、六条・上所遺跡においても堅穴住居が検出されている。

古代には周辺の自然河道の埋没がほぼ完了しており、現在まで残存している条里地割が施工される。林・坊城遺跡、多肥松林遺跡、松縄下所遺跡等において条里地割に伴う溝や掘立柱建物が検出されており、多肥松林遺跡では溝から斎串が出土している。また、松縄下所遺跡においては、南北方向の道路状遺跡が検出されている。さらに、大池の南側は日本に現存する田園・莊園図の中で最も古い天平7年（735）の年紀を有する「弘福寺領讃岐国山田郡田図」の比定地である。

中世では松林遺跡やさこ・長池II遺跡において溝が検出されており、これらは条里地割に伴う溝と考えられる。林・坊城遺跡、六条・上所遺跡や東山崎・水田遺跡では掘立柱建物が検出されている。特に東山崎・水田遺跡では中世の区画を伴う屋敷地等が検出されている。

近世では六条・上所遺跡や林宗高遺跡で井戸や掘立柱建物等が検出されている。



第3図 林・坊城遺跡周辺の遺跡分布図

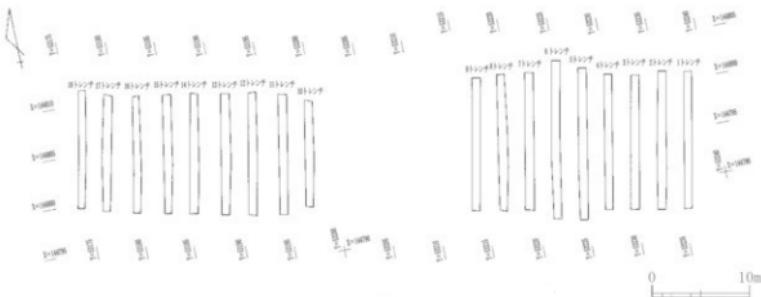
第3章 発掘調査の成果

第1節 調査の概要

1 調査の方法 (第4図)

調査対象地は2棟の建物建設範囲であるが、今回の発掘調査は掘削深度が遺構面まで達する南北方向の建物基礎の設置箇所で行った。基礎は建物内に約3m間隔に配置されており、基礎の幅を基準として幅1mのトレンチを設定した。建物1棟につき9本のトレンチが設定され、トレンチの総数は18本であり、東から1トレンチ・2トレンチ・・・17トレンチ・18トレンチと呼称した。

調査は、試掘調査により基本土層や遺構面までの掘削深度を把握していたことから重機による遺構面上までの掘削の後に入力による遺構調査を実施した。その後に手測りによる遺構平面図を作成し、写真撮影を行った。図面は平面図・断面図とともに調査時には概ね縮尺1/20で作図し、報告に際して適宜縮尺を変更した。平面形の測量は国土座標第IV系(世界測地系)を基準とし、標高は調査時に仮ベンチマークを設定し調査終了後に水準点からのレベル移動を行った。写真撮影は35mmフィルムを用い、モノクロ・カラーリバーサルフィルムで記録し、補助的にデジタルカメラも用いた。

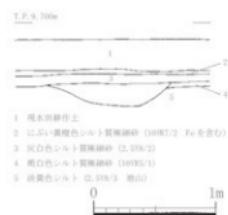


第4図 調査トレンチ設定図

2 基本土層

調査地における調査前の状況は、東西3枚の水田となっており、標高は西側の水田が約9.7m、中央と東側が約9.6mであり、水田面に若干の高低差があった。

土層は調査区全域において同様な水平堆積状況を示しているので、基本土層図(第5図)のみ掲載する。現地表面から遺構検出面である地山の間は4層に分層できる。第1層は現水田耕作土、第2層はにぶい黄橙色シルト質極細砂であり、褐鉄鉱を含む現水田の床土である。第3層は灰白色シルト質極細砂であり、土壤層と非土壤層の薄い層が交互に数層堆積しており近世の水田と考えられる。第4層は褐灰色シルト質極細砂であり、調査区南側の地山直上に薄く堆積する。地山は淡黄色シルトであり、現地表面からの深さは約40cmである。



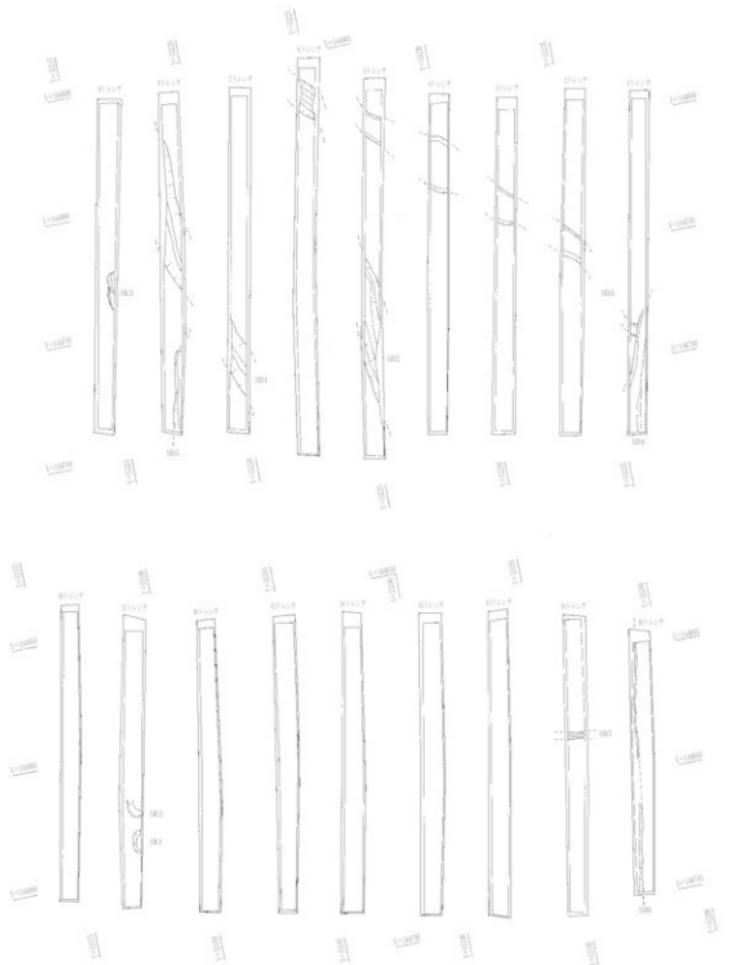
第5図 基本土層図

第2節 遺構・遺物

溝

S D 1 (第7図)

7トレンチの南端と8トレンチの中央において検出した溝であり、検出面の標高は9.15 m前後である。検出した全長は約11.20 m、溝の方向はN-10°-Wでやや蛇行気味に延びる。溝上端の幅は7トレンチで1.15 mと推定できる。検出面からの深さは0.40 mである。断面は「V」字形を呈し、



第6図 遺構平面図

底面の幅は0.15 mであり、底面の標高は8.81 m前後でほぼ水平である。埋土は5層に分層でき、中央より下位に4層の堆積が見られ、最上に黒褐色シルト質極細砂が厚く堆積する。所属時期は出土遺物より古墳時代後期（6C末～7C初頭）と考えられる。

遺物は7トレンチのみで出土した。1は土師器の高杯の口縁部であり、内外面ともに摩滅により調整は不明、焼成は良好である。胎土は1mm以下の粒子を少量含む。外面の色調はにぶい黄橙色、内面は明黄褐色である。2は土師器の高杯で、内外面ともにナデが施され、外面の一部に板ナデの痕跡が残る。焼成は良好である。胎土は1mm以下の粒子を少量含む。外面の色調はにぶい橙色、内面は灰白色である。

S D 2（第7図）

5トレンチ南側と6トレンチ北端において検出した溝である。検出面の標高は9.16 mである。検出した全長は約13.80 mであり、溝の方向はN-5°-Wで、北側で西方向に若干方向を変え蛇行気味に延びる。溝上端の幅は6トレンチで1.10 mを測り、5トレンチでは1.30 mと推定できる。検出面からの深さは0.60 mである。溝上位の掘り込みは緩やかな傾斜であるが、中位から急傾斜で落ち込み、断面は「V」字形である。底面の幅は0.20～0.25 mであり、その標高は南端で8.66 m、北端で8.59 mであり北側に向かってやや下がっている。埋土は6層に分層され、下層の灰黄褐色シルト質極細砂が厚く堆積し、中層の第2～5層が薄い堆積をなし、上層の黒褐色シルト質極細砂がやや厚く堆積する。遺物の出土がないため所属時期を確定することはできないが、溝の形状や埋土がSD1とほぼ同様であることから、SD1と同一時期の遺構と考えられる。

S D 3（第8図）

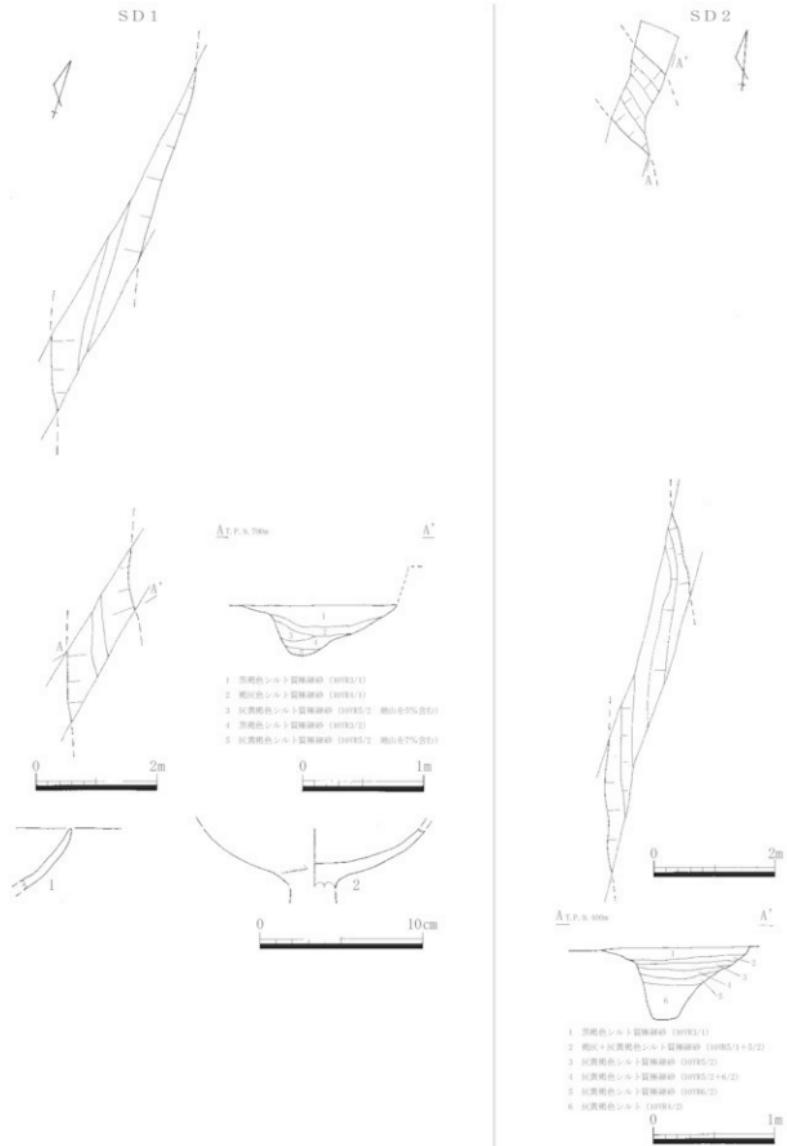
1トレンチ南側と2・3トレンチの中央と4・5トレンチの北側において検出した溝であり、SD4に切られる。検出面の標高は9.14 m前後である。検出した全長は約14.40 mであり、溝の方向はN-42°-Wで、若干蛇行している。溝上端の幅は最大で2.20 mを測るが、1トレンチでは0.47 mと急激に狭くなる。検出面からの深さは4～10cmであり、断面は非常に浅い「U」字形を呈する。底面の標高は南端で9.08m、北端で9.06mである。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。遺物の出土がないため所属時期を確定することはできないが、SD4に切られることから新旧関係はあるが、埋土はSD2の第2層とほぼ同一であり、SD1と時期差はほとんどないと考えられる。

S D 4（第8図）

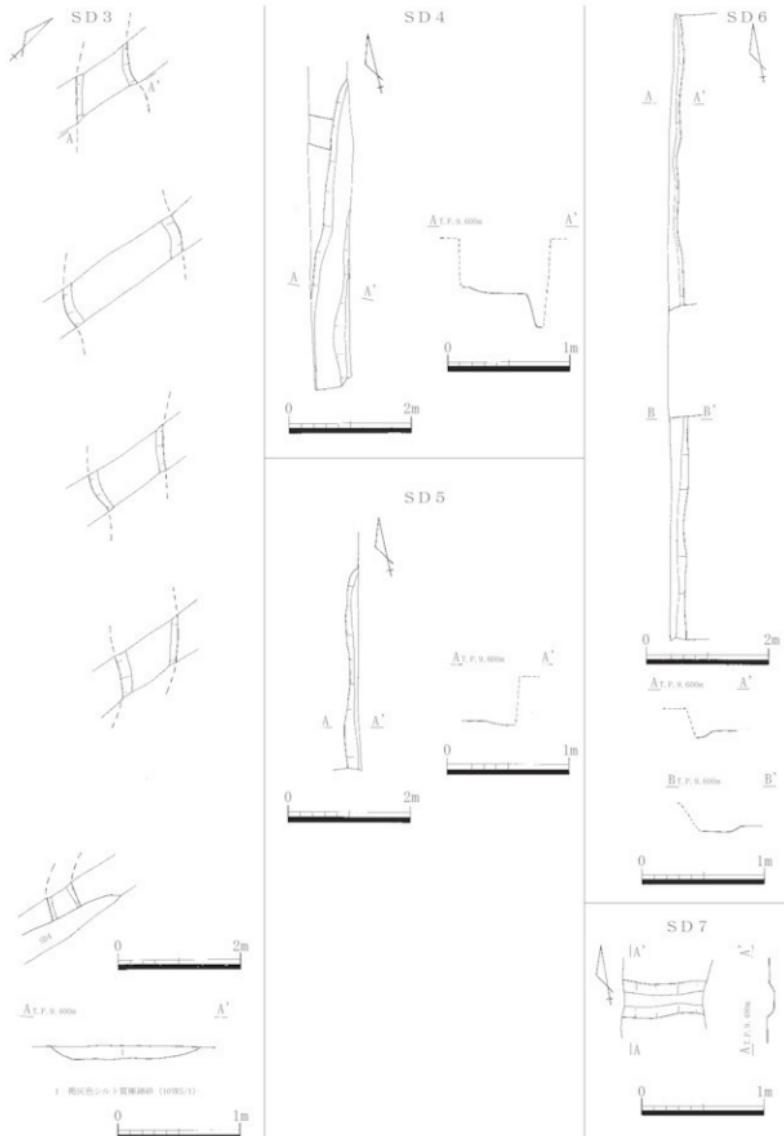
1トレンチの南側において検出した遺構である。本調査では遺構の西端部のみの検出であり、遺構の全貌は不明である。しかし、擁壁部の立会調査で本遺構の南側に幅1.20 m、深さ0.50 m以上の溝を確認しており、同一遺構の可能性が高いので溝として報告する。検出面の標高は9.10 mである。検出した全長は5.03 mであり、溝の方向はN-15°-Eで直線的に延びる。検出した幅は0.60 mで、検出面からの深さは0.39 mである。溝上位の掘り込みは緩やかな傾斜であるが、中位から急傾斜で落ち込む。埋土は褐灰色シルト質極細砂の第1層と灰黄褐色シルト質極細砂の第2層に分層でき、第2層が厚く堆積する。遺物の出土がないため所属時期を確定することはできないが、溝の形状や埋土がSD1とほぼ同様であることから、SD1と同一時期の遺構と考えられる。

S D 5（第8図）

8トレンチの南側において検出した。遺構の西端部のみの検出であり、遺構の全貌は不明であるが溝として報告する。検出面の標高は9.13 mである。検出した全長は3.30 mであり、溝の方向はN-12°-Eでありほぼ直線的に延びる。検出した最大幅は0.25 m、検出面からの深さは4 cmである。底面は平坦であり、標高は9.09 mである。埋土は灰黄褐色シルト質極細砂の単一層である。遺物の出土がないため所属時期を確定することはできないが、中世の可能性が考えられる。



第7図 SD 1・2 平・断面図、出土遺物実測図



第8図 SD 3～7 平・断面図

S D 6 (第8図)

10 トレンチにおいて検出した溝である。検出面の標高は9.25 m前後である。検出した全長は10.32 mであり、溝の方向はN-10°-Eでほぼ直線的に延びる。検出した最大幅は0.30 m、検出面からの深さは5 cmである。底面は平坦である。埋土は灰黄褐色シルト質極細砂の単一層である。遺物の出土がないため所属時期は不明であるが、S D 5と同一時期のものと考えられる。

S D 7 (第8図)

11 トレンチにおいて検出した溝である。検出面の標高は9.27 mである。検出した全長は0.70 mであり、溝の方向はN-90°-Wである。幅は0.30 m、検出面からの深さは4 cmである。埋土は灰黄色シルト質極細砂の単一層である。遺物の出土がないため所属時期は不明である。

土坑

S K 1 (第9図)

17 トレンチの南側において検出した土坑である。検出面の標高は9.25 mである。平面形は隅丸方形で、南北方向の長さは0.92 m、検出面からの深さは0.25 mである。底面は平坦である。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。埋土から所属時期は近世と考えられる。

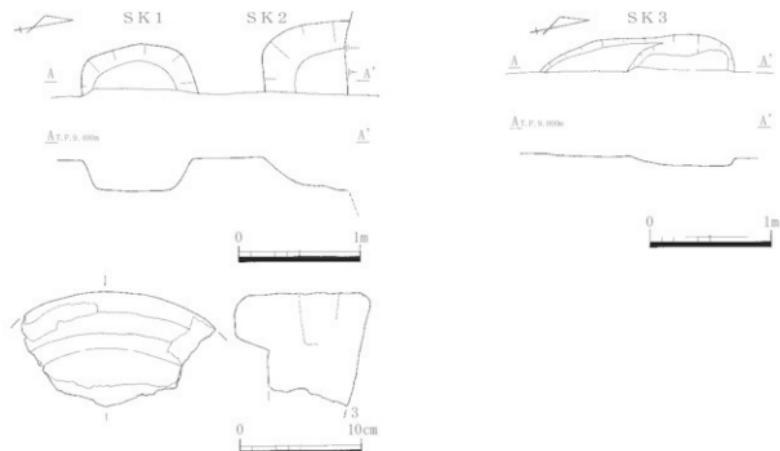
出土遺物は石臼の上臼(3)のみであり、横打込穴の一部が残る。石材は凝灰岩である。

S K 2 (第9図)

17 トレンチの南側において検出した土坑である。検出面の標高は9.25 mである。平面形は隅丸方形で、検出した南北方向の長さは0.68 m、検出面からの深さは0.26 mである。底面は中央がやや深くなる。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。埋土から所属時期は近世と考えられる。

S K 3 (第9図)

9 トレンチの中央において検出した土坑である。検出面の標高は9.17 mである。平面形は梢円形である。南北方向の長さは1.58 mである。底面は南側に段を有し、最深部の深さは7 cmである。埋土はにぶい黄橙色シルト質極細砂の単一層である。遺物の出土がないため所属時期は不明である。



第9図 SK 1～3 平・断面図、出土遺物実測図

第4章　まとめ

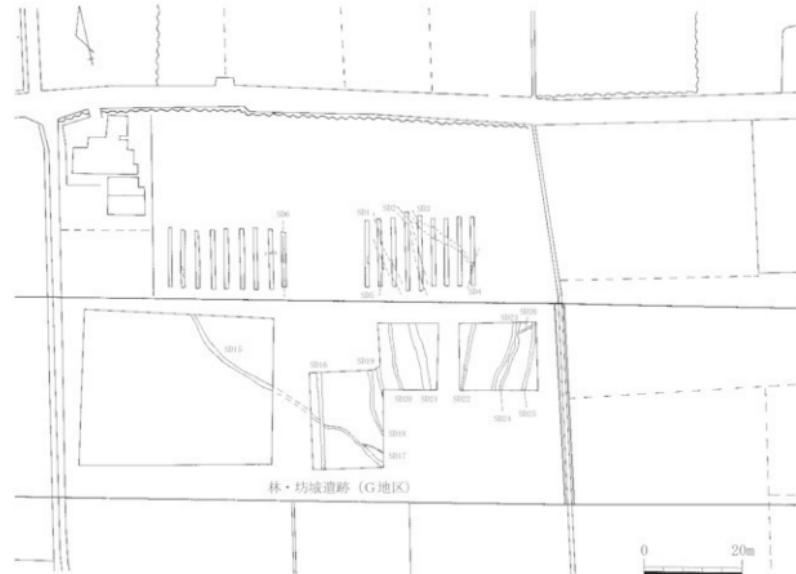
第1節　遺構の変遷

第3章で概述したように、今回の調査で検出した遺構は溝7本と土坑3基であるが、遺物が出土して所属時期を明確にできた遺構はSD1・SK1のみである。その他の遺構は平面形と断面形の形状・規模や方向、さらに埋土から時期を推定しているに過ぎない。このため将来的に周辺部において発掘調査が実施された場合にこれらの遺構の所属時期が変わることも想定される。特に溝に関してはその可能性が高い。本報告書では検出した遺構の所属時期を古墳時代・中世・近世の3時期として報告する。

古墳時代後期に属するものはSD1～4である。SD1・2はほぼ同じ方向に平行して延びており、断面の形状は上端が緩やかで急激に深くなる、いわゆる「V」字形を呈する。溝の幅・深さはほぼ同一規模であり、埋土も類似する。SD1から出土した土器は古墳時代後期（6C末～7C初頭）に比定される。SD4はSD1・2とやや異なる方向に延びるが、「V」字形の断面や埋土が類似しており、同時期のものと考えられる。SD3は他の3本の溝と全く異なる方向に延び、断面形状は浅い「U」字形を呈するが、埋土が同じであることからほとんど時期差はないと考える。これらの溝は規模の大きな溝であり、やや蛇行気味に延びる。

SD5～7は小規模の溝であり、残存する条里地割と同一方向で直線的に延びる。遺物の出土がないため明確な時期を決定することはできないが、埋土、平面形及び方向から判断して中世の溝である可能性が高いと考えられる。

近世の遺構はSK1・2であり、肥溜めと考えられる。



第10図 林・坊城遺跡遺構配置図 (『林・坊城遺跡』1993年第3・14・15図を再トレース・加筆)

第2節 林・坊城遺跡周辺の土地利用

今回の調査区は昭和63年に高松東道路建設に伴い発掘調査が行われた林・坊城遺跡のG1～3地区の北側に隣接する位置にあたるとともに、同年に高松東道路建設に伴い発掘調査が行われた六条・上所遺跡A地区の北西側に位置し、3つの遺跡は密接な関係をもつと考えられる。そこで林・坊城遺跡G1～3地区の遺構と本遺跡の遺構を対比し（第10図）、さらに六条・上所遺跡A地区を視野に入れ、本遺跡を含めた周辺地域の土地利用の変遷を考える。なお、同一の遺跡名を区別するため、今回の調査を「本調査」、昭和63年の調査を「林・坊城遺跡」とその遺構名をゴシック体で表記する。

最初に林・坊城遺跡と六条・上所遺跡の概要を述べる。林・坊城遺跡G1～3地区ではSD14～26の13本の溝が検出され、そのうちで時期の判明した遺構は弥生時代前期のSD14と古代のSD15・17～21と中世のSD16である。SD15は幅0.30～1.00m、深さ0.15mで、断面は浅い「U」字形を呈する。出土した須恵器の短頸壺は8～9世紀に比定される。SD18・19・21は幅0.50～1.90m、深さ0.40～0.60mを測り、SD20は幅0.50m、深さ0.10mである。G3地区にSD22～25がほぼ平行に検出されるが、SD18～21と異なる方向に延びており、遺物の出土がないため時期不明である。

六条・上所遺跡のA地区では弥生時代後期のSR01～05、古墳時代後期のSD07～11とSR10・11、中世のSX01が検出されている。ほとんどの遺構はA地区の東部に集中している。

次に、林・坊城遺跡の溝と本遺跡の溝との対比を検討する。SD15は17・18トレンチで検出されていないので、本調査区の西側に延びると思われる。SD18・19は9トレンチと10トレンチの間に延びると思われる。SD20は本遺跡SD5の延長部に位置するが、埋土が異なることから別遺構と思われる。SD21は本遺跡SD1の延長部に位置し、断面形態も類似することから同一遺構の可能性が高いと考えられる。SD22は本遺跡SD4の延長部に位置するが、断面形態が全く異なることから別の溝であると考える。SD23～26は本調査区の東側に延びると思われる。本遺跡のSD2・4は林・坊城遺跡には該当する溝がなく、G2地区とG3地区の間の未調査部分に延びると思われる。本遺跡SD3の断面形態はSD22と類似するが、方向が大きく違うため同一遺構と確定することはできない。本遺跡と林・坊城遺跡の溝で同一遺構と考えられたのは本遺跡SD1と林・坊城遺跡SD21のみである。林・坊城遺跡報告書でSD21は古代の遺構としており、SD1の所属時期と異なっている。しかし、SD21の時期決定の根拠は掘立柱建物の梁行方向と溝の方向が同一であるというだけであり、本調査の成果によればSD21の所属時期は古墳時代後期（6C末～7C初頭）であると考えられる。

以上の成果を基に、林・坊城遺跡周辺の土地利用の変遷を考える。

弥生時代前期は林・坊城遺跡SD14のみ検出されている。

古墳時代後期（6C末～7C初頭）の遺構は、本遺跡のSD1～4、六条・上所遺跡A地区の東部に溝5本と河川2本が検出されているが、西部は空白地帯である。林・坊城遺跡ではSD21のみである。本遺跡を含めたこの周辺では灌漑施設としての溝のみが検出されていることから判断して、この地域は生産域としての土地利用が考えられる。

林・坊城遺跡で検出した古代の遺構は掘立柱建物1棟・溝5本（SD15・17～20）と非常に希薄であり、その分布は遺跡の中央部と東部である。掘立柱建物は東端部の溝と同一微高地上に存在するが、両者の距離は大きく隔たっており、その間は空白地帯である。本遺跡を含めたこの周辺では灌漑施設としての溝のみが検出されていることから判断して、この地域は古墳時代後期から引き続いで生産域としての土地利用が考えられる。

中世のSD 16は幅0.70～1.10m、深さ0.25mで、直線的に南北方向に延びる。本遺跡のSD 6はSD 16の約6mの間隔を持って南北方向に平行して延びている。その方向は現地表面に良好に残存する条里地割と同一である。復元された条里地割（第11図）では本遺跡が所在する水田の東側は山田郡条里的六条と七条との境界線となっており、本遺跡を含めたこの地域は七条11里12坪である。SD 5は境界線からの距離が約35m、SD 16は約50m、SD 6は約56mを測り、この3本の溝は1辺1町方格の坪をさらに分割する地割りに伴う溝である可能性が考えられる。林・坊城遺跡で検出した中世の構造は掘立柱建物1棟、柵列1基、溝3本と非常に希薄である。掘立柱建物・柵列は東端部の溝と同一微高地上に存在するが、両者の距離は隔たっている。六条・上所遺跡のA地区では性格不明構造1基のみが検出されている。本遺跡を含めたこの周辺では灌漑施設としての溝のみが検出されていることから判断して、当該地区域は古代から引き続いて生産域としての土地利用が考えられる。



第11図 条里分布図 (S : 1/20,000 『讃岐国弘福寺領の調査』付図高松平野条里分布図に加筆)

参考文献

- 金田章裕 1992年「高松平野の条里と弘福寺領讃岐国山田郡田図」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会
宮崎哲治 1993年『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告 第2冊 林・坊城遺跡』香川県教育委員会・建設省四国地方建設局・(財)香川県埋蔵文化財調査センター
北山健一郎 1995年『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告 第5冊 六条・上所遺跡』香川県教育委員会・建設省四国地方建設局・(財)香川県埋蔵文化財調査センター



SD 1 土層（南から）



SD 3 完掘（東から）



SD 1 完掘（南から）



SD 4 完掘（南西から）



SD 2 土層（西から）



SD 6 完掘（南から）



SD 2 完掘（南から）



SK 1・2 完掘（南西から）

報告書抄録

ふりがな	はやし・ぼうじろいせき							
書名	林・坊城遺跡							
副書名	アパート建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第182集							
編著者名	中西克也、杉原賢治							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087-839-2660							
発行年月日	西暦 2017年3月21日							
ふりがな 所収遺跡名	じょざいちら 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
はやし・ぼうじろいせき 林・坊城遺跡	かやし・ぼうじろいせき 林・坊城遺跡 香川県 高松市 林町	市町村 37201	遺跡番号	34° 18' 15"	134° 4' 41"	2016.11. 14~ 2016.12. 5	124 m ²	アパート建 設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
はやし・ぼうじろいせき 林・坊城遺跡	集落	古墳時代 中世 近世	溝 溝 土坑	土師器				
要約	古墳時代の溝4本と中世の溝3本、近世の土坑3基を検出した。古墳時代の溝はやや蛇行しながら南北に延びる。中世の溝は条里地割と同一で直線的に南北方向に延びる。							

高松市埋蔵文化財調査報告 第182集
アパート建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
<h3>林・坊城遺跡</h3>
平成29年3月21日
編集 高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号
発行 高松市教育委員会
印刷 有限会社 河端商会